
あなたの部屋に神隠し

森永パピ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたの部屋に神隠し

【Nコード】

N2081BA

【作者名】

森永パピ子

【あらすじ】

とある温泉地に赴任した訳あり小学校教師の俺、池畑昂志は、地元の銭湯の看板娘・湯本雪絵さんに想いを寄せている。ある夜銭湯の帰り道、雪絵さんの声に呼び止められて、辺りを見回すと段ボールの中に十五センチほどのミニチュアになった彼女がいた。そのうえ神様っぽい狐耳の巫女服幼女まで現れて、ミニチュア雪絵さんをお持ち帰りすることに。夢？ 幻？ いやいや。先生、普通の恋がしたいです。

恋の異常現象！？

「お疲れ様です。池畑先生」

「こんにちは。お疲れ様です」

三ヶ月前に大都会の小学校から一身上の都合により、とある田舎の少人数制の小学校に赴任し、山猿子猿の相手で疲れきった俺に、春の太陽のように麗らかな笑顔を向けてくれたのは、古臭い銭湯に咲いた一輪の花、湯本雪絵さん。

誰だ今、湯の花つて思ったヤツ。雪絵さんをあんな洗面器に浮いた垢みたいな物質と一緒にするな。彼女を例えるならば、綻び始めた芍薬。未踏地の新雪。春の小川。真冬の月。明けの明星。うーん。この感動を全く言葉にできない。

雪絵さんの実家である風呂屋・湯本は源泉かけ流しが売りのオールドスタイルな銭湯で、今だに150円という某安売りの殿堂も歯が立たないだろう破格値を維持している。知る人ぞ知る鄙びた温泉地であり、利用者の殆どが地元民であるこの土地ならはだ。少し遠いが某有名すぎる避暑地に比べて知名度の低さと言ったらない。

カウンターの脇には七十円の超薄超小型石鹸や一つ五十円の二回使えたらいいようなミニチュアのリンズインシャンプーが入ったプラスチックの網籠なんか置いてある。常連客は近所の爺さん婆さんが大半で二十七歳の俺が最年少だ。

中は広々青タイル。富士山なんて小細工はないし、洗面器は黄色いケロオン印。シャワーなんて洒落たものはなく、赤と青のポッチがついた蛇口のみ。ものっそアツツイ源泉か、ものっそツツメタイ水のセルフサービスだ。

そんな風呂屋・湯本でいいお湯を頂き、雪絵さんと神田川のシチュエーションになったら、俺の洗い髪が芯まで冷えても構わない！
と思いつつながら、暖簾をくぐり、二つ目の電柱に差し掛かった時。

「先生！」

不意に呼び止められた。

「え。雪絵さん……？」

振り向いたが、薄暗い夜道には誰もいない。

おかしい。

確かに幻聴レベルの小さなボリユームだったが、今のはたしかに雪絵さんの声だったような。

「先生！ 池畑先生！」

お化けや妖怪の類は全く信じていないので、その可能性は無視する。子供の悪戯にしてはこの声真似は高等技術すぎるし、町内会やシルバー人材センターのドッキリも有り得ない。

俺の恋の病は幻聴が聴こえる程、重症だったってことだろうか。

捨て切れない望みを託し、もう一度辺りを見回したがやはり雪絵さんの姿などない。肩を落として歩こうとした。

「池畑先生！ 下です下！ 電柱の下！」

下？ なんのことだろうかと乏しい灯りの電柱を見やれば、四センチ四方の段ボール箱があった。嘘。いつの間に？ こんなのがあったっけ？ こんな箱誰も気づかないなんておかしいでしょ。思わずしゃがんで箱を開けてみる。

「ひぎゃあっ！」

お化け屋敷でもビビったことがない、鉄の心臓をお持ちですねと言われたこの俺が、悲鳴を上げ、あまつさえ腰を抜かした。

だって、箱の中には体長十五センチくらいの精巧な雪絵さんフィギュアが……。いや、これ……。動いてるぞ！？ っていうか、なにこれ宇宙の神秘！？ 俺の妄想が作り出した超異常現象！？ 「よかったあ……。凍死するかと思いました」

パニックに陥っている俺をよそに、雪絵さんのミニチュアはホツと胸を撫で下ろしている。敷き詰められたタオルに身を包んでいるが、間違いない。全裸だ！

そりゃ寒いだろう。

なにこれどういうこと？ 昔、俺が子供の時こんなドラマあったよな。あれ最後どうなるんだっけ？ 主演してた女優さん最近見ないよな。愕然としながらも思考回路は目まぐるしい。

「雪絵さんですよね？」

確認のためミニチュアに尋ねると、ミニチュアは頷いた。

「はい。湯本雪絵です」

「こういう場合、交番ですかね？ それとも湯本さんところに直接お届けした方がいいですか？」

「ダメです！」

あ。ダメなんだ。

きつぱり言い切られて思わず納得したが。

「いや、ダメじゃないでしょ。俺正しい選択肢上げたと思いますよ」

「とにかくダメなんです！」

「なんでですか」

そりやお持ち帰りしたいですけど、どうしたらいいんですか。と
考えていたら。

「速やかに持って帰れよ」

頭上から子供の声が降ってきた。

なんだ騷のなつてないガキだな、と顔をあげると、金色の長い髪を下のほうで結った狐耳の露出の高い巫女服みたいな格好をした幼女が浮いていた。

「ええ……」

金色の瞳が俺を睨む。

「なんじゃその顔は」

「だって有り得ない事が起こりすぎていい加減疲れたよ」

「不甲斐ない男よの。せつかく千年ぶりに妾が現れたというのに。

むせび泣き喜べ」

「なんでよ。俺あんたのこと知らないし。その格好寒くないわけ？

その偉そうな口調からして神様とかいうオチなんだろうけどさ、それ以外ならどう考えたってそれ今流行りの萌え系のコスプレだよ

？ 俺の趣味じゃないけどね！」

「なにを言っておるのかさっぱりじゃが、神様というのは当たりじや。なかなか察しのいい男よ。その調子で速やかにその女子を持って帰るがよい」

「町の人にはれたらどうすんの。俺また変態扱いされて追い出されるじゃん。やだよ。この町気に入ってるのに」

「その女子が死んでもよいのか。ならば、なかったことにしてよいぞ」

「さあ、雪絵さん。俺の家でよかつたらおいでなさい」

金色のつり目で睨まれ、俺はミニチュアの雪絵さん入り段ボール箱を抱えた。

「ありがとうございます。池畑先生」

ミニチュアの雪絵さんが花のような笑顔を浮かべた。

異常現象その後。

六畳二間の木造アパートは、一階と二階それぞれ三戸部屋があるのだが、住人が二階の一番奥の俺と一階の真ん中に爺さんが一人しか住んでいない。

深さはあるが広さがトイレットペーパーのケース二つ分しかない風呂釜の狭い浴室と別に、無理やり水洗便所に変えてもらった和式の便所。もろ一人暮らし用の手狭な台所。

辛うじて住めるといった古きよき安普請アパートだが、家賃いろいろ込みで一萬八千円と破格なので、俺一人住むには問題ない。

照明器具がスプートニクで、チェアがイームズで、時計がネルソンので、家具がレトロフイーチャーなのは、前の家から持ってきたものだから、ボロ屋には不釣合いにモダンなデザインだとしても許されたい。

だって捨てるのもったいないじゃない。ベッドマットは二トリだけどね！

とまあ、こんな感じ俺の部屋に、五寸ばかりなると愛らしき人をお持ち帰りしたものの、雪絵さんは慣れない乗り物のせいで乗り物酔いになってしまった。クリスマスケーキよりも慎重に抱えて持ってきたはずなのにおかしいな。いや、それよりも。

「さて、狐娘。これはどういうことだか説明してもらおうか」

「それが神に教えを乞う態度か。護摩を焚け」

「どう見たって仏教系じゃないくせになに言ってるんだ。いなり寿司でも買ってきてやろうか、ごんぎつね」

「ぬうう！ 神を冒瀆する気が罰当たり者！ もっと妾を崇め奉れ！」

狐娘は悔しそうになにか印を結ぶように手を合わせたが、ピリッと首から肩に微弱な電気が走っただけだ。

「おお！ なんか楽！」

驚いたことにコリが解消されている！

「くぬうつつ！ 悔しけり悔しけり！ もっと妾に神通力があればお前ごときケチヨンケチヨンのギッタンギッタンにしてくれるのに！」

狐娘は俺の頭上で手足をばたつかせもんどりうつっている。

こいつは存在からお話にならない。

仕方ないので、雪絵さんに聞くことにしてダンボールの中を覗き込むと、彼女はタオルを身体に巻き付けてまだorzの形に横たわっていた。気絶しているっぽい。駄目だ。ここに話せる人間はいない。

— 先ず落ち着こう。

ワイヤーチェアに腰掛け、煙草に火を点ける。

これ、夢だよな。多分俺、今頃銭湯で湯あたりしてぶっ倒れてるんだ。うんうん。

「現実逃避か。うつけ者」

狐娘がようやく落ち着いたらしく、ふよふよと俺の右隣に浮いてきた。

「こんなファンタジックな現実からどこに逃げるんだよ。むしろこれが夢だっけのほうがよっぽどリアリティあるぜ」

「認める。これは現実だ。そのこの女子の願いを叶えたつもりが妾の神通力が足りなくてな、この有様じゃ」

「雪絵さんの願い？」

「人に教えてしまったら叶うもんも叶わぬであろう、馬鹿者が」

うわ、なんかイラッとした。

「じゃあ、それは置いといて、一体狐娘は雪絵さんをどうしたくてこうなったんだ？」

「企業秘密じゃ」

「うるせえよ。倒産寸前の零細企業レベルのクセして。そもそも神様商売するのは企業じゃねえだろ」

「うるさいのはお前じゃ！ 妾とて好きでこんな没九十九神になっ

たわけじゃない！ 妾はもともと妖力の高い白狐だったのだぞ！
神になるくらいすごいんだぞ！ それなのに最近の人間どもは信仰心を忘れたり捨てたり、地元の祠よりも知名度の高い方へ流れていたり！ おかげで妾たちのような地域密着型神は衰退する一方じゃ！ 神無月の出雲大社でどれほど肩身の狭い思いをしているか知らぬだろう！ 神の世は古より格差社会じゃ！ 古事記に載るような名家出身の神は別じゃが、その他の平の神々は嘲笑われていい見世物じゃ！ 人間どもは困った時に神頼みすればなんとかしてもらえると思いおつて！ なら妾ら没落九十九神はどうすればよいのじゃ！ 信仰心がなければ神通力も弱まり下等妖怪に格下げ。救いの手などありはせぬ！」

ぎゃんぎゃん喚いたかと思えば狐娘はべそべそと泣き始めた。

「神様つてのはなんだ、その、人気商売なんだな。零細企業とか言つて悪かつたよ」

だめもとでその金色の髪に手を伸ばすと、触れた。なにこれ、俺もしかして死期が近いとか？ 不安になりながら狐娘の頭をなでる。子供が泣いているのは、やはり忍びない。っていうか、営業頑張ってるのに売れないアイドルと言つたほうが近いかもしれない。

「その娘が現われなんだら妾も妖狐に逆戻りするところであつた」
狐娘もとい、なんか妖狐だつたらしい九十九神はかく語りき。

もともと湯本一族が氏子で、雪絵さんのお婆さんまでは、甲斐甲斐しく狐の祠を手入れしてくれていたのだが、息子の代になってから嫁、つまりは雪絵さんのお母さんが仏壇にしか手を合わせない人で、お祖母さんが亡くなった後は、狐娘に対する信仰心がさほどない親戚たちの足も遠退いてしまい、狐娘の祠も廃れかけ、神通力も弱まつたらしい。

唯一、小さな頃からお祖母さんとお参りに行っていた雪絵さんだけが、狐娘への信仰心を持ち、お祖母さんに変わって祠の手入れやお供え物を続けていたとのこと。そのおかげで今、こうして狐娘は存在しているらしい。

見た目は幼女だが、さすが中身は千年以上生きている神。年寄りらしく話が長い。

「婆が幼いその娘を連れて妾の存在を教えてなかったら、妾はとうに妖怪の類になっていた。だからこそ、その娘がいる間はあの湯屋を存続させんと守ってきた。あと、供物のぼたもち屋もな」

うっかり船を漕いでいたら、またピリツと電流が走った。

「あ。ごめん、話終わった？」

「神の声を前に居眠りなど不信心な！」

「うう……こっちは子猿相手に疲れてんだよ。んで？ 貴重な氏子の願いを叶えようとしたら、力不足でちっさくしちゃって道端に放置して、俺に拾わせて？ 何がしたいんだよ、あんた」

「ぬうう！ 妾はこの娘の縁結びをしようとしたのじゃ！ 決して放置などして居らぬ！」

小さな拳をぎゅうと握り、ぶんぶん振り回しながらきいきい喚く。マジ狐っていうか、職場の小猿と変わらない。

「っていうか、え？ なに？ 縁結びって、雪絵さんと、俺？」

なんだ、このごんぎつねいい奴じゃん！ 狐娘の握りこぶしをガツチリ握り、尋ねると、狐娘は顔を真っ赤にして怒り始めた。

「ぬうう！ 口が滑った！ 口惜しい！ 乙女の秘密は口外してはならぬのにいいい！！」

「だいじょぶだいじょぶ、ごんぎつね。俺と雪絵さんはもうガツチリバツチリ赤い糸で結ばれまくってるから！ ささ、雪絵さんの呪い解いて解いて！」

「できぬ！」

「はあ？！」

何言っちゃっててくれるの？

「心配しなくても超幸せにするしなるし！」

「真か？」

「真に。なんなら血判押すし」

真顔で答えたが、狐娘は難しい顔のまままだ。

「できぬ」

「な・ん・で？」

あまりにもきつぱりと言い切られて、そんなに信用がないのかと詰め寄ると、狐娘は泣きそうな顔で答えた。

「だから言つたる。神通力の大元である信仰心が足りぬと」

おっと、愛に障害は付き物とな。思い合っている俺と雪絵さん。

歳の差は五歳くらいのもだから問題ないが、体格差がありすぎる。これじゃーあんなことやこんなことができるはずがない。

「じゃあ、どうすんの」

「信仰心を集めるのじゃ」

狐娘は宙でふんぞり返っている。集めろって、待てコラ。赤い羽根募金じゃねえんだぞ。

「どうするんだよ」

「信仰の対象である妾がそんなこと知るはずもないだろう！ お前から人間が勝手に祀り上げてきたのではないか！」

「ええー……。俺、宗教とかカルトとか苦手なんだけど」

「知らぬ！ この娘と結ばれないならお前がどうにかしろ！」

狐娘は無責任なことをいってプライツとそっぽを向いてしまった。

確かに結ばれたいのでどうにかしたいが、まずこの状況はどうしたらいいんだ？

ミニチュアサイズで不可抗力で本人が望んだこととは言え、傍目から見れば、俺が人様の娘さんを拉致監禁してることになるわけで。また無実の罪に問われるのか？ やつぱりあのまま湯本さんちに戻せばよかった。

明日、雪絵さんが目覚めたらちゃんと話し合おう。

気絶している雪絵さんの為にエアコンの暖房を入れ、掛け布団の代わりに厚手のタオルをかけた。

もしかしたらやつぱり夢かも知れない。

もう寝よう。

ふて腐れた狐娘も明日になったらいいかもしれないじゃないか。

夢だ。これはきつと夢なんだ。
そう言い聞かせながら、ベッドへ入って目を閉じた。

やっぱり夢じゃない！（前書き）

長いので分けました。

やっぱり夢じゃない！

あー。喉乾燥してるな。加湿器入れとけばよかった。雪絵さん大丈夫かな。

目が覚めて寝ぼけた頭でそう考え、ハツとする。

夢だったらしいのにな！　　と顔をベッドの左側、ムラノタイルのローテーブルに向けると、あった。あったよ、段ボール箱。

自由が丘のアンティークショップで購入した二人掛けのソファには、やっぱり狐娘が。

緑を基調としたストライプのアメリカ製のそれにいかなる角度で観察しようとも似合っていない。

和風というべきか。和という字を冠しがたい風変わりな巫女服、へそ出しで腹が冷えないのだろうか。ノースリーブなのか袖つきなのか、肩と腕の間を縫うように赤い紐で結い止められている。そんな曖昧なデザインで、赤い襷のついた、本来なら袴と呼ぶ履物は膝上十五センチ丈で、白いニーソックスに、ヴィヴィアン辺りが出しそうな底の厚い真っ赤なストラップシューズ。センスおかしいんじゃないかと思うが、そこは神様クオリティ。俺の知ったこっちゃない。

元は妖力の高い白狐だったらしいのだが、九十九神に昇華したとえらい存在らしい。っていうか現役神様なら巫女服って違うね？

マジ神秘。神のセンス、マジ摩訶不思議。

ベッドから出て、箱の中を覗き込むと、雪絵さんは眠っている。

昨夜俺が掛けたままのタオル。寝相がいいんだなあと感心して、青白いほどの寝顔を眺める。うん、なんかヤバイ人みたいだよ。俺の冷静な部分が冷ややかな第三者視線を送ってくる。っていうか、マジ青白い。なんか、嫌な予感。

全神経を集中させ、細心の注意を払いそっと人差し指でその頬に触れてみる。小さすぎてよくわからん。

「雪絵さん、朝ですよ。雪絵さん」

等身大のこの状態の彼女を腕の中に収めて言いたい。
反応がないのは何ですか？

「雪絵さん」

無反応。

「おおい起きやがれ狐娘！！ 雪絵さんの様子がおかしいんだけど！！」

ソファの狐娘の肩をがつくんがつくん揺らすと、狐娘は素っ頓狂な悲鳴を上げて俺の顔面に狐パンチを食らわせた。

「寝込みを襲うとは暴漢め！！ 妾の力甘く見るでないぞ！！」

ピリッ！

「肩こりは治ってたんだよ！！ いいから雪絵さんの状態なんとかしろよ！！」

「ふぎゃあああつ！ 妾に気安く触るでない！！」

「うるせえ！ こちとらガキになんのも感情も沸かんわ！！ いいから目え覚ませ阿呆狐！」

暴れまわるクソガキを押さえつけようとして我に帰れば、普通に幼女に襲いかかる変態の体勢だ。

ひとまず距離を置き、馬鹿狐を睨む。

「雪絵さんが起きないのは何故だ。ちよっとお前確かめる」

狐娘は俺をにらみ返し、何かブツブツ不満をたれながらもふよふよと低空飛行でダンボールを覗き込む。

「おい。娘。起きりゃ。これ娘……」

がしつとなんの躊躇もなく両手で雪絵さんを持ち上げると頬をつけたり、匂いをかいだりしている。

丁重に扱えよ！ っていうかなんかコレ、なんかのロボットアニメで観た光景。握り潰すなよ！ とハラハラしていると、狐娘がこちらを見た。

「何故目を覚まさぬ！」

「俺が聞いてんだよ！」

「うぬうう。死んでは居らぬが、いわゆる仮死状態じゃ。妾の神通力が足りぬので娘の活動力もごく限られておるようじゃな。しばらくすれば目を覚ますじやろうが、起きていられるのはほんの数分やも知れぬ」

真面目くさった顔で狐娘は推定した。

なんだよ、それ。

普通に引き合わせてくれれば、順調に物事は進んだはずなのに。こんなことが起きなければ俺だって時期を見て雪絵さんにアタックできた。

それなのに、こんな存在自体おかしな狐娘が現れたせいで無駄な障害が出来てしまった。

雪絵さんも雪絵さんだ。何故神頼みなんかしたんだ。

人の心は人が動かすものなのに。

神なんか不確かな存在に頼って成就した恋なんか、自分のものじゃない。

「なんだよそれ。なんでそんな中途半端な奇跡起こすんだよ。信仰心足りないの分かってたんだろ？ 神通力も殆どないの分かってたんだから初めから無茶なことすんなよ。九十九神なんかじゃなくて疫病神じゃねえか」

狐娘が金色の瞳を見張って、大粒の涙を零した。

「わ、妾は疫病神などではない！ 妾だって氏神じゃ、氏子の幸せを手伝おうとして何が悪い！」

「だからな、できないことはするなって言っただよ。悪いとかいとかの話じゃないの」

狐娘はソファの上につつぶせに突っ伏してヨヨヨと泣いている。

「まったく、千年以上生きていくせに、見た目通りのガキじゃないか。」

すぐべそべそするし、これが神か？

呆れてフオーする気も起きない。

出来そこないの奇跡より朝の時間は貴重なんだ。

俺は狐娘を放置して出勤準備にとりかかった。

「じゃあ俺仕事行くから雪絵さんのこと頼むぞ」

うーん。これも神頼みになるのだろうか。狐娘はまだ突っ伏したままベそをかいていた。

神隠し騒動勃発。

勤務先の小学校まで約五キロ。人生の折り返し地点に近い俺が歩くはずがない。

全校生徒が五十以下人で、俺が担任しているのは、一年生六人と二年生八人。一つの教室の前後に分けて、黒板とホワイトボードを使って、授業を行う。

後部席の二年生に復習のプリントを配り、それをやらせている間に一年生に教科の指導をし、ノートを書いている間にプリントを終わらせた二年生の指導に取り掛かる。『復習』『課題』『実行』『理解』『復習と応用』を一年生と二年生の間ですらしながら進行させる。

或いは国語や理科、図工なら一年生の教科書から半分、二年生の教科書から半分ずつピックアップして学習し、次の年に残りの半分のやるといったやり方もあるらしいのだが、俺はやっていない。

僻地なので以前の学校よりカリキュラムに対する概念は緩い（なわけではない。）おかげで、計画通りの進度で実行していくが、年度当初計画は帳簿上だけの話で個別指導も行う。

昼休みには、夏なら近くの川で遊びたがる生徒もいて、結構怖いが付き添ったりもする。今のところ一二年生は全員仲が良く、課外授業で屋外に行っても引率が楽だ。

夏休みの宿題に一人一人の弱点に合わせて違うプリントを作成したり、カリキュラムの内容に合わせていくのは少々厄介だが、やり甲斐はある。

幸い、変にませた生徒もいないので以前に比べると随分楽しい。子供は嫌いではないのでこの仕事は好きだ。

さて、今日はどんな一日になるだろうなと考えながら、車にキーを差し込んでいると背後から階下の爺さん、山中さんに声を掛けられた。

「おはよう先生。昨夜から風呂屋の娘が行方不明なんだと。あんた知ってたかい？」

「サーツと血の気が引くのがわかった。さすが田舎。ご近所ネットワークが電子メールばりだ。」

「ええ？ 本当ですか？ 行方不明なんて物騒ですね」

「家にいますけどね。とは言えず、白々しい台詞を口にした。」

「いやあ、家の裏の山にいったつきり姿がみえなんだと。神隠しかつて皆騒いどるよ。都会から来た先生には神隠しなんかわかる？」

「数年前にそんなアニメ映画がありましたね。神隠しにあった少女が名前を取られて湯屋で働かされるんですね」

「山中さんはわかっていているのかいないのか微妙な反応で何故かワハハ！ と笑い飛ばす。」

「若い人も神隠しはしつとるんなあ！ いやな。今、銭湯の親父と町役場の人らが探しに出とるみたいでな、わしも暇なもんで行こうかと思つとるんですけどね。もし先生も見かけたらすぐ帰るように言つてやって！」

「わかりました。明日は休みなのでなにか私にも手伝えることがあればおっしゃってください」

「言いながら冷や汗と胃痛が阿波踊りだ。数年前の事件でも真犯人が一般人を装っていたというのがあったが、いや、人とはげに恐ろしい。」

出勤時間を言い訳にして山中さんと別れ、車に乗り込む。

今回ばかりは身に覚えのないというわけでもない。

運転席で煙草に火をつける。深い息をつくと心臓が暴れまくっているのがわかった。後ろめたさと罪悪感で重くなった胸に無理やり煙を入れたが、落ち着けるはずがなかった。

煙草が切れたので、家から車で三分くらいの煙草屋に立ち寄りことした。

今どれだけの騒ぎになっているのか気になるというのもある。八十くらいいってそんな耳の悪い老女だが三ヶ月の間で俺の吸う銘柄

を把握している。

何も言わなくてもカウンターの向こうの座敷から俺の煙草をワゴンカートンだして、ふごふご言いながら（実際はありがとねと言って）金を受け取る。

だが今日は違った。

「しえんしえ。雪絵ちゃんが居らんようになったの知つとるけ？」

ふごふごと口をもごつかせながら訊いてきた。

「さっき山中さんに聞きました。神隠しだそうで」

「んなあ。わしらが子供ん時はちよいちよあつたんけどー……」

遠い思い出に時が止まったのか、或いは心臓が止まったのか、老女は俺の背後を見遣ったまま一時停止した。

「狐じゃあああ！！！」

齒のない老女の絶叫に、ビクウツと身体が竦み上がり、地面から三ミリ浮いた気がした。

更に暴れまくる心臓辺りを手で押さえて振り向くと、狐娘がふよふよと浮いている。

「なんじゃこの婆。妾の姿が見えるのか」

煙草屋のお婆さんは土下座のような体勢で両手を合わせてふがふが言っている。たぶん念仏でも唱えているのだろう。

「妾は阿弥陀ではないでの」

腰に両手を当てて踏ん返り返っているが老女には聞こえていないようだ。

俺は狐娘に寄り、怒鳴りたいのを堪えて小声で話しかけた。

「なんでここにいるんだよ！」

「雪絵が目を覚ましたぞ。腹が減ったらしくての。食うものを探しに山に戻るうとしたらお前を見かけたでの、さっきの仕返しに驚かしてやるうと思っただのじゃ」

「脳天気な氏神様だな！ 今町じゃ神隠し騒動勃発だ！」

「その通りである」

蠅の要領で叩き落してやりたい。

「どうしてくれんだよ！ もしこれで俺の部屋から雪絵さんが発見されたら俺は犯罪者になるんだぞ？ 悪者の変態扱いだ！」

「神隠しじゃ。お前のせいではない」

狐娘はよく見ると、充血していた。泣き腫らした瞼でニツカリ笑った。

「雪絵とて惚れたお前を悪者に仕立て上げるはずがないではないか」

「そうはいつでも周りはそう思わないんだよ！」

「そう案じるな。この界隈の古い者どもは元は妾の氏子たちじゃ。きやつらはそんな人間ではない」

「信仰心が薄れて神通力がない氏神のクセしてよくそんな自信持てるな」

「信じるものは救われると異国の神が教えておったぞ」

「そういうのバクリっていうんだよ」

悪態をついたものの、狐娘があんまり無垢に微笑み、金色の髪が朝日でキラキラ光るので、ちょっと神々しさみたいなのを感じてしまった。

「妾みたいな人気のない神を信じたくないならそれでよい。だがな、男。惚れておるなら雪絵を信じてやってもいいのではないか」

狐娘は神様みたいな尊い教えを説き、少し寂しそうに笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2081ba/>

あなたの部屋に神隠し

2012年1月6日12時45分発行